



名古屋アイクリニック
中村友昭先生

スポーツをするに当たって目が良いに越したことはありません。メガネは激しい動きに対して邪魔になるし、視界が狭くなります。また、コンタクトレンズは衝撃に対して飛んでしまう危険性もあります。そのため、例えば競艇選手になろうとすると裸眼視力で0.8以上が必要とされますし、消防士や警察官の資格にもある程度の視力の制約があります。

では、スポーツ選手、とくにトップアスリートにはどの程度の視力が必要とされるのでしょうか。スポーツに関する視力としてはよく「動体視力」が問題になりますね。実際のところ動いている物体に対する視力を測定することは難しく、動体視力はおおよそ、静止した状態での視力に依存すると言われています。また、動いている物体に対する反応は、脳の認識や情報処理能力といったいわゆる

「反射神経」であり、これは視力というより日々の脳のトレーニング次第かもしれません。いずれにせよ、一般的にスポーツを楽しむためには、やはりよい視力は必要でしょう。水泳もゴーグルにレンズを入れることはできますが、プールサイドでもゴーグルを付けたままでは楽しむことはできません。コンタクトを付けた上でゴーグルをしても水が入ると流れてしまわないか心配になります。また紫外線対策の度付きのスポーツ用サングラスは高価で種類が少ないようです。

メガネも要らず、コンタクトレンズも付けずに裸眼でよく見えるようになれば、スポーツの腕も上がり、また気楽に楽しむことができます。そういう意味ではスポーツマンにおける屈折矯正手術への需要は多く、その果たす役割は大きいと考えます。

では、スポーツマンに対してはどのような手術法が望ましいかと

くに打撲を受ける可能性があるスポーツには、外力に対して強く安心できるものがよいと思います。3ミリ以下という小さな傷しか作らない最新の手術SMILEや、高度な近視まで矯正できるICLという方法が、アスリートに対する最も安全な屈折矯正手術だと思われます。また、コンタクトレンズを就寝時に付けて矯正するオルソケラトロジーというお子さんにも適応する方法も、今とても注目されています。

2020年に向けて、日本のスポーツ界はどんどん盛り上がっていくと思われます。同時に、一般の方のスポーツへの関心も高まっていくでしょう。鈴木スポーツ庁長官も以前にレーシックを受けて快適に過ごされているそうです。スポーツをする方がもっと視力に関心を持ち、屈折矯正手術がスポーツ振興に、ひいては金メダル獲得へと貢献できたら嬉しい限りです。